

国際協力特別賞

「おもてなし」の前に考える

Choate Rosemary Hall 11年

久世 眞由美

「おもてなし。」4年前に大流行したこの言葉を念頭に、国を挙げて観光立国を目指す日本。しかし、そのために一番大切なことが、取り残されていないだろうか。

私は高校1年の夏、生まれ育った東京を離れ、アメリカの高校に進学した。国籍、文化、人種、育った環境などにおいて様々な生徒たちと共に過ごす寮生活が始まった。

初めこそ、いきなり自分が民族的にも、人種的にも少数派になった状況に戸惑ったが、多様性を体現したようなそのコミュニティーは、すぐにとっても居心地の良い場所になった。

その大きな理由は、身体的な特徴や性的指向などに関する生徒間のからかいが全く聞かれないことである。もちろん様々な外見やセクシュアリティを持つ生徒がいるが、「全員が違って当たり前」という意識があるため、彼らが中傷の対象になることはない。

例えば、女友達と5人で出掛けた帰り道でのこと。仲良く話していると、5人のうち2人が、話の流れで、自分はバイセクシュアルなのだと言った。知り合って間もない頃だったが、「告白」というような重苦しいものではなく、自分の出身地を言うかのような気軽さだった。周りも、そんなんだ、と軽く反応し、皆が口々に好きな人の噂話を始めた。

また、私の学年にいるゲイの少年が、派手な緑色のマニキュアを塗ってきたこともあった。彼には何人かが近づいて、「良い色だね」と、ごく普通に褒めていた。

誰も驚いたり、避けたり、笑ったりしない。ただその人を丸ごと、受け止める。その文化に私はとても感動した。

日本に帰ってくると、私は度々、「チビ」「デブ」などの外見をからかう言葉や、「ホモ」など性的少数者を侮辱するような言葉を、行き交う人の会話やテレビ番組の中で耳にする。そんな時、私の頭の中に渦巻くのは疑問符ともどかしさ、悲しさだ。親しみを込めた発言のつもりでも、言われた相手が笑って聞き流しているように見えても、本当は人の心の奥深くを傷つけている。

無論、アメリカにも苛めの問題が存在し、人種差別も残っているが、日本では、そうした中傷がタブーにさえなっていないという印象を受ける。テレビに出ている大人たちでさえ、人の外見やセクシュアリティなどを公然と笑いの種にしてしまう。漫才であれば、何を言っても良いのだろうか。人を傷つけかねない発言で、笑いを取るような番組が、本当に視聴者に受け入れられて

いるのであれば、視聴者側にも意識の低さがあるのではないか。

こうした残念な現状の要因の1つが、日本の単一民族性にあると思う。肌の色や顔の特徴、使用言語など、多くの共通点を持つ人間が集まっている日本では、周りとの僅少な違いが、からかいの標的になり得る。また、留学する前の私がそうだったように、日本人の多くは、国内で常に民族的・人種的多数派として生きている。すると、その多数派のグループに属さない人を見ると、彼らに「部外者」というラベルをほぼ反射的に貼り、時には自分の方が優れていると決めつけたりする。在日外国人へのヘイトスピーチなども、この心理から生まれるのかもしれない。

なぜ、全ての人を、同じ枠にはめようとするのだろうか。人がそれぞれ違う性格を持っているように、違う見た目や、違うセクシュアリティが存在して当然ではないか。

日本は今、東京オリンピック・パラリンピックの準備を進めている。世界中から訪れる人々を喜ばせたいならば、日本人の意識改革が必要だと思う。人種や見た目や、その他の色々な違いに気を取られず、一人一人の人間性をまっすぐに見つめる、そんな心の眼を身につけた国だけが、真の国際交流を可能にするはずだ。形だけの観光サービスでは、「おもてなし」は成し得ない。